

## 研究の背景・目的

本県で2003年度から施行しているツキノワグマの「特定鳥獣保護管理計画」は、2012年度から第三期（5年間）が施行されています。この計画では、モニタリング調査（環境省告示指針）が義務づけられており、生息環境、生息実態、被害状況等を継続して調査し、各種の施策の効果を検証する必要があります。また、本課題では、クマの出沒状況と餌となる堅果類等の豊凶、捕獲個体の栄養、採餌状況との関係などを分析して、人里への大量出沒の原因を究明します。

## 研究方法

「特定鳥獣保護管理計画」で求められるモニタリングのために生息環境や被害状況などの継続した調査を行います。①生息環境・利用実態調査、②捕獲個体調査、③学習放獣の効果検証、④クマハギの発生動向の把握と防除技術の確立、⑤人身事故の発生原因の究明。

## 研究状況

①2014年度の捕獲個体の年齢構成（分析個体78頭）は0～21歳、平均年齢（0歳を除く）は6.4（オス7.0、メス5.5）歳でした。捕獲区分別では、有害捕獲個体は平均6.9（オス7.3、メス6.0）歳、錯誤捕獲個体は平均5.8（オス6.7、メス4.3）歳であって、1～3歳の亜成獣が32%を占めました（図1）。

②有害捕獲個体の胃内容物は、被害作物であるハチの巣やカキが、また錯誤捕獲個体からは、堅果類や双子葉植物などが多く出現しました。一方、糞には、4～6月は双子葉植物やヤマザクラなどの液果類を、7～12月は堅果類、動物質および双子葉植物を多く認めました。また、例年に比べて、餌となる山菜（ハナウド、タケノコなど）や昆虫（ハチ、アリ）の割合が少なく、このことが6～8月の出沒の増加に影響した可能性が考えられました。

③目視による堅果類の豊凶は、シバグリは豊作、ミズナラとコナラは並作、ブナとクマノミズキは凶作であり、全体的には並作でした。シートトラップによる落下量は、ブナは0.0個/m<sup>2</sup>と凶作でしたが、ミズナラは10.6個/m<sup>2</sup>、コナラは12.8個/m<sup>2</sup>と並作でした。また、雲南市吉田町のヒノキ3林分において、古いクマハギを確認したことから、被害木10数本を伐倒して加害年を判定しました。作成した円盤から、加害は2008年、2009年、2010年、2011年であって、この地域では少なくとも6年前にはクマハギ被害が発生していたことが明らかとなりました。

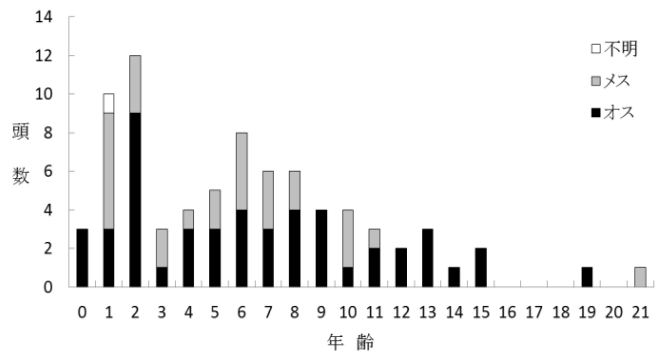


図1 2014年度の捕獲個体の年齢構成

## 研究成果の活用・今後の研究計画

各種のモニタリング調査によって、「特定鳥獣保護管理計画」による施策の効果を検証して、次期の計画にフィードバックする。また、人里への大量出沒の原因を究明して、今後の適切な保護管理技術の確立に資する。ツキノワグマの適切な保護管理が推進できると共に、人とクマとの共存が可能となる。また、人身事故の原因究明によって、中山間地域における安心した生活を可能とする。

MOUNTAINOUS REGION RESEARCH CENTER  
島根県 中山間地域研究センター

〒690-3405 島根県飯石郡飯南町上来島1207

担当科 : 鳥獣対策科

研究担当者 : 澤田 誠吾 (さわだ せいご)

問い合わせ先 : 0854-76-3818 (直通)

E-mail : [chusankan@pref.shimane.lg.jp](mailto:chusankan@pref.shimane.lg.jp) (代表)

試験研究課題名 : ツキノワグマの特定鳥獣保護管理計画のモニタリング調査 (研究期間 : H24～28)

